

テーマ別講師研究会成果報告書

研究会名	「朝(あした)の会」研究会	代表者名	森本英之
------	---------------	------	------

■研究成果

1. 研究テーマ

研究会創設者・谷川道雄先生の意向として、学術研究者の専門分野にとらわれず、広く人間を中心とした事象について、理系、文系問わずそれぞれの立場から学際的な検討を重ねることで、専門的偏狭を避ける狙いもあり、世代、専門、立場を超えて同一テーブルで向き合うことの意義を大事にするという考えに基づいた場を築くことにありました。それは歴史、農業、信仰、哲学、政治経済、自然地理、民俗学など多岐にわたり、自由度の高い分、テーマの焦点は絞りにくい点ありましたが、特定のカテゴリーに拘らない自由度は比類なきものでした。しかし、やはり歴史分野との関連性は一貫していたように思います。

2. 研究に至る課題意識

例えば、単純に言えば、一つの学問が隣の学問領域と重なるところがあるのは必然であるという考えに基づいて、「学際」という言葉があるが、1960年代の学生運動の最中に一つ研究室に閉じこもっていた個別研究の学者が「専門馬鹿」と揶揄されたように、高度経済成長の後、グローバル化の中で学際的な広い視野が求められる時代が到来して21世紀に至ると、それは本来個別研究が持っていたデリカシーな分野が無視されて大雑把なグローバル化の流れに押し流されていたと思う。(例えば2011年に訪れた内モンゴルで師範大学のM先生は同自治区の学校からモンゴル語教育を排除する中央政府に対する不満を述べておられた。)個別研究の芽を軽視する動きは日本の若い学者世代から活力を奪い、国内、国外への学術論文の発表数も勢いを失ってしまった。今の日本のノーベル賞受賞者もオールド世代であります。余談を言えば、2025年末独ハノーバーでの農業機械学会に出ていたある研究者(神大准教授)は、論文発表件数の多いある国の内容が殆ど「コピペ」だったという。彼等は他国の研究室に入り込み研究段階の課題を漏らさず本国に情報提供しているという話は聞いていたが、その姿は、かつての日本の「ものまね」と揶揄されていた姿とダブるようだが、科学技術の発展に向けた旺盛な国策が背景にある。むしろ研究者を育てようとする本気度が日本の国策に見られない結果が現状だと思う。

企業も官僚も今日本は力(気概)を失っている。少子・高齢化の先にある日本がどのような姿になっているのか「自明の理」を本気になって危惧する輩が見えない。皆器が小さくなってしまっている。我々はこのまま無知・無能の徒に成り下がるのか。それは、大分以前に山極寿一元日本学術会議会長の論考「変化する科学と社会」でも指摘されていました。研究に値する課題とは、やはり人間を基軸とした歴史・科学・〇〇ではないだろうか。何事も本気でやればそれなりの「結果」は出ると思う。われわれは「それなりの一コマ」を生きているのだから。

3. 研究の進め方

各自が課題を自由に提起し、説明する。その内容に対して自由に感想を述べる。その場合、学術研究に長けた先生の発表には勿論敬意を以って拝聴するも、異論があれば発表者も初心者目線を忘れずに対等に応答する。資料が出る時はその説明に時間を使う。シユメール文化の発表の時、神戸の博物館に各自出向くこともあった。又、時事問題については記録映像や映画上映もした。とりわけ、パレスチナ問題では東京外大や京都大や早稲田大教授や日本キリスト教団牧師の講話に何度か講話を戴きました。

4. 具体的な成果

参加者の多くが、現役よりも退役組が多いこともあり、参加者が研究会の成果を各職域に持ち帰って普及させる手立てが少ないのが現状です。なんといっても会員の多くは「未来ある若者」とは異なります。しかし、成果は会員にとっての「知」の共有です。具体的内容は別冊の例会誌 p66～68 の活動録のテーマです。

「林住期」「遊行期」のリタイア世代なので、これはこれで切実な課題と向き合っています。河合塾も若者世代を相手としてきましたが、今は、「我が余生をいかに生きるべきか」とする世代が横溢していることに関心を持つべきでもあります。『受験生の河合塾』から「オールド(老後)世代の河合塾」或いは「障害児・障害者・困窮者相手の専門的救済サービス業や人材派遣業」も視野にする柔軟さが要るのではないのでしょうか？つまり、河合塾、或いは「テーマ研究」部門が立ち上げた事業について自ら評価して成功と言えるかどうかは、一般には多くの人を動員出来るかどうか(売り上げの多寡)で決まるのでしょうか、勿論それは徹底した社会のニーズに応えるものになるのでしょうか。

つまり、少子化の中の幼児教育、或いは高齢化の中の「生き甲斐」教育でしょうか。「朝の会」がその意味で何を果たせたのか、或いは何を果たせ得るのかです。私個人の考えでは、「知」の悦びはこれからも絶えないと思いますが、それ以上に大きなことは「生きている悦び」だと思います。それは文学・哲学の領域ですが、

古人は「偉大さは悲慘さによって演繹される」と言いましたが、それは知性に基づく想像力への「刺激の提供」だと思います。河合塾の使命は眠れる想像力に刺激を与えることだと思います。